

私は10月24日、11月14日、11月28日に北九州YMCAで実習をさせていただいた。私はこの実習でたくさんを学んだ。

#### 10月24日

- ・1回目の実習前のリハーサルでは自分が思っているより声が出ていないことがわかった。本番ではとりあえず声を大きく出そうと意識して授業をした。実際にちゃんと大きな声で授業を進めることができた。しかし、最後まで大きな声で話すことができなかった。「休んでください」という指示がうまく通らなかった。
- ・声を大きく出すということに意識を集中しすぎて、アイコンタクトをうまく行えていない部分があった。指名をした時にアイコンタクトをきちんとしていないと、指名された人が本当に自分が指名されたのか分からなくて混乱するので、ちゃんとアイコンタクトをするべきであった。
- ・指名をすべてその場で行うのはよかったが、指名するまでに時間がかかっていた。これは2回目も3回目も同様であった。席と名前を大まかでもいいので覚えておいたほうがよかった。
- ・学習者がわからない時は質問を繰り返したり、別の説明の仕方に変更したりするなどの対応ができた。授業の中の長文読解の部分で「本を自分でコピーしてもいいですか」という問題で、指名した学習者が答えを間違えた。私は教案では「ホワイトボードに貼ってある問題文の中で回答につながる文章を指し示す。それでもわからなかった場合はその文章を読ませる。」と書いてあった。しかし、学習者は問題自体をあまり理解していなかった。そこで、私は問題文の説明を行うことにした。何度か言葉を変えて説明したが、学習者には伝わらなかった。私はそれを説明するときにジェスチャーを用いたり、ホワイトボードを活用したりするべきであった。
- ・授業の最初に行った単語の確認では、教材のサイズが大きく、うまく使うことができなかった。この授業で復習を行う単語の数が多かったのも相まってさらに持ちづらく、カードを前に出すときも大変だった。
- ・時間配分がうまくできたと思う。「ピアノを弾くことができますか」などの「～することができますか」という質問をいくつかする予定だった。しかし、教案でその活動をする予定だった時間を過ぎていたため、省いた。また、最後の新語クイズをしなければいけなかったが、もう授業終了間近だったので、宿題という形にして終わらせるなどの対応ができたので良かった。

#### 11月14日

- ・1回目よりアイコンタクトをとるようにした。しかし、アイコンタクトをとることに集中しすぎて、1回目の実習授業よりも声が出ていなかった。DVDで自分の授業を見たときに、自分の声が小さくて今何をやっているのかわからなかった。実際に作文

の内容の説明で私の声が小さくて、本来は母国の友達に宛てた手紙を書く予定だったが、うまく伝わらず、何人かは隣の席の人に宛てた手紙を書いていた。大きな声を出すということの重要性に気付くことができた。

- ・教材をホワイトボードから剥がすときに工夫ができた。教材をただ剥がすのは時間がかかるし、学習者も暇になるので、学習者に教材に書いてあるものを読ませながら剥がすという工夫ができた。
- ・教案をちゃんと覚えていなかったのもので、学習者にしてほしいなと思っていたことがうまくできなくて少し残念だった。
- ・学習者との会話が難しかった。実習前は学習者がどう返すか全くわからなかったため、会話をうまく続けることができるのかどうか不安だった。しかし、本番になると学習者との会話が思いのほか続いてしまい、どこで会話を終わらせるのかに悩んだ。区切りのいいところで会話を終わらせる力も重要だと感じた。

#### 11月28日

- ・会話の新語の確認で用意ができるものは実物を見せるようにした。懐中電灯をつけてみせると、学習者の反応が良かった。余計な言葉を使うことなく、学習者もすぐに理解することができた。
- ・最後の実習授業で、初めてNさんと2人で授業を行った。2人で練習する時間があまりとれなくて、リハーサルの時もうまく授業を進めることができなかった。本番ではNさんが単語の説明をしているときに何ができるだろうと考えながら動いた。例えばNさんが教材を片付けている間に私がDVDを準備したり、片付けを手伝ったりすることができた。
- ・自分の中で苦手な部分を克服することができなかった。リハーサルの時からずっと苦手な部分があったのだが、そこを本番でも克服することができなくて悔しかったが、分からなくなったら学習者が助けてくれた。最初の実習が始まる前に先生がおっしゃった「学習者は敵ではなく、一緒に授業を創っていく仲間である」という言葉を理解できた瞬間でもあった。
- ・机を動かしてほしいときに上手く指示が通らなかった。私たちはあらかじめ1つ机を動かしておき、それを見本にして学習者に机を動かしてほしいのだが、うまく伝わらず、時間が無駄にかかってしまった。もっと簡単な日本語を使ったりするなどの伝える工夫が必要だったと思う。
- ・最後にグループワークがあり、1つのグループに私とNさんは学習者の補助をした。そのときに学習者の間違いを訂正したのだが、学習者が不機嫌になることがあったので、訂正の仕方に気を付けた。ただ訂正するのではなく、出来たときに褒めるなどの学習者の学習意欲を維持する工夫をした。
- ・最後のグループワークでは、グループごとに進行具合に差が出ていたので、進行が早

いグループに合わせて一通りの項目を終わらせることを優先したが、グループごとに違う活動を用意しておけばよかったかなと思った。

最初の実習授業では「とにかく大きな声を出そう」と1つのことに集中して取り組んでいたが、回数を重ねるごとに「アイコンタクトをとろう」や「今ここで何をしたらいいのか」等と。複数のことに注意を払いながら授業を行うことができた。今回の実習では、臨機応変な対応を学べた。もしもを考えて教案を作っていたが、どうしても不測の出来事は必ずと言っていいほど起きた。私はその時に自分の最善を尽くすことはできたが、いろんな人のアドバイスをもらったり、自分以外の人々の授業を見たりすることでより良い対策を勉強することができた。

そして、人に伝えようと思う気持ちが強くなった。私は今まであまり人に伝えることを意識して会話をすることがなかった。声が小さいと言われても、大きな声を出すのは苦手だし、説明がわかりづらいと友人にと言われても、あまり気にしたことはなかった。しかし、授業を行っていくうちに、相手に聞こえないとなにも伝わらないことや、簡単な日本語で話しても伝わらないことがあることを理解できた。相手に伝わるためにはどうしたらいいかと考えるようになり、授業はより良いものになったと思う。

もしまた日本語を教える機会があれば、もっと説明の際にジェスチャーを使ったり、学習者との会話を楽しむような授業を行いたい。私は説明の時に言葉で説明する癖はだいぶ直ってきたが、ジェスチャーを使って説明することは苦手だということに気付いた。日常生活でジェスチャーを取り入れて話す機会は少ないが、説明のツールとしてはすごくいいと思うので、教材だけでなくそのような説明の仕方も取り入れたいなと思った。また、今回は2回ほど学習者とディスカッションを行ったが、その時に学習者が頑張って日本語を使って自分から話す姿に驚いた。彼らは私が思っているよりも話したいという気持ちが強いことに気付いた。学習者たちが会話をする機会を増やすような授業をしてみたいと思った。